ジョルジュ・オープトの生涯・研究・方法論

――スターリニズム批判・インタナショナル・労働運動史――

山内昭人

まえがき

ここに紹介するのは、一九五八年にルーマニアからフランスへ亡命し、西欧で再デビューを遂げ、そして七八年に一陣の風が吹き抜けるように五〇歳の若さでこの世を去った特異な歴史家ジョルジュ・オープトである。

前半生はゲオルゲ・ハウプトと発音し、後半生は仏語読みする彼の生涯は、まさしく二〇世紀の騒乱に巻き込まれていた。即ち、世界大戦、革命、ファシズム、そして国際社会主義運動の希望と失敗に。その中で彼は、ユダヤ人としてホロコーストに遭遇し、生き残り、次いでマルクス主義者としてスターリニズムに直面し、亡命の道を選んだ。

オープトは生涯をかけて労働運動史の非スターリニズム化をめざしたといえる。以下、その彼の研究並びに方法論の紹介・検討が、伝記的な事実紹介の後、行われるのだが、その際、既に高い評価が定まっているものよりもむしろ、最後期のより仮説的ながら斬新な研究・方法論に多くの光があてられる。①

① ここでオープトの業績の評価に関して予め注記しておけば、彼の学問的貢献を総括した研究書は未だ出ていない。それは評価に値しないからでは決してなく、本文でも強調されるように、オープトの尋常ならぬ多種・多方面の研究故に、そのフォローを全体的になしうる研究者を見い出しがたいことによるところが大きい。その証拠に、フランス労働運動史の老舗的学界誌『社会運動』は、同誌の生みの親であるJ・メトロンへの追悼号（一四四号付録特別号、一九八八年一〇―一一月）に匹敵する（ページ数では、それ以上の一・八倍もの）追悼号（一一一号、一九八〇年四―六月）を故オープトに献じたほどである。メトロンへの追悼がフランスの研究者によって占められたのと対照的に、オープトへは欧米各国から追悼文や追悼記念論文が寄せられた。にもかかわらず、それらによってオープトへの全体的評価が下された

わけではない。各研究者によって自らの専門と交錯する限りでの（しかしそれだけでも大したものだとの）評価にとどまっている。わずかにA. Rabinbach（発音は未詳）が小論ながら、オープトの生涯と業績を包括的に捉える試みを先駆的に行い、またE・ホブズボームが死後公刊されたオープトの英訳論文集への序文の中で概括的ながら、オープト評価の本質に迫る論評を行っている。両者をはじめ追悼号等でなされた各評価の検証作業もまた、本稿においてオープトの個々の業績に立ち入ってなされる。

わが国では、いち早く一九六九年に西川正雄氏がオープトの綿密な第二インター史料目録並びに研究に着目、利用しはじめたものの、後続の研究者が殆ど現れていない。オープトの研究に少なからず負っている西川氏の第二インターに関する研究も、その近著を私が論評したように（第二章、注⑦）、オープトの主テーゼへ肉薄する方向に向かってはいないし、業績全体への目配りも弱い。それ故、オープトの業績の包括的把握、紹介がまずは求められると考える私は、それを先のボリシェヴィキと第二インターとの関係についての研究紹介（第三章、注⑤）に続いて本稿で試みる。

第一章　生　涯

第一節　亡　命　前

オープトは自らの経歴、経験について多くを語らなかった。ましてや公にしたものは皆無に近い。ここでは友人たちに控え目に語られた話をもとに、彼の伝記的事実を明らかにしていく。①

オープトは一九二八年一月二八日、トランシルヴァニア地方のサトゥ・マーレでハンガリー人の母とドイツ系の父との間に生まれたユダヤ人の子である。ハンガリー領であったその地は、第一次世界大戦後ルーマニアに属することになった。父親は小さなシャンデリアの会社を経営し、オープトは幼年期、恵まれた教育を受けた。その中等教育を受けていた一六歳の年、一九四四年にオープトは家族とともにナチスによって収容所に送られ、アウシュヴィツ、ダッハウ、そしてブーヘンヴァルトを転々とし、翌年連合国軍によって解放された時、彼らについていかず、ルーマニアに戻ることを選んだ。それは家族に会えるかもしれないとの希望をもってだったが、むだだった。

学業に復帰したオープトは、大学入学資格をとり、クルージの大学に入学した。四六年、彼は学士となり、より高等の教育を受けるため奨学金を得て、レニングラードに（スターリン時代の最後の）六年間留学することになった。五二年にレニングラード大学歴史学部での研究を終え、新たな奨学金を得て学位論文の準備に入った。そして、一九世紀後半のルーマニア－ロシアの革命的関係史で学位を得て帰国後、ブカレスト大学歴史学部の助教授に任命された。

レニングラード留学中にマルクス主義者となり、党員にもなっていたオープトは、益々重要な役割を担うことになった。即ち、

五三年からルーマニア・アカデミーの歴史研究所の近・現代史部長に、五五年か五六年から同アカデミー刊行の『研究　歴史雑誌』の副編集長になった。

第二節　亡命とその後

そのようなオープトが、なぜ亡命するに至ったのか。その経過と理由の解明を試みる。

一九五三年三月五日、スターリンは死去した。それに先立つ一月一三日、ソ連の諸機関紙は白衣の、即ちクレムリン医師団の陰謀を摘発したと報じた。四月四日、逮捕されていた一三名が釈放されたが、残る二名は拷問死を遂げていた。この事件の報道でユダヤ人の国際的民族主義組織との関係がフレーム・アップされ、ポグロム的反ユダヤ主義カンパニアが展開されることになった。医学関係だけでなく、その他の研究所や大学からも「予防的に」何千というユダヤ系の専門家が放逐された。オープトはユダヤ人として、この事件に深く心揺さぶられたという。

続くきっかけは五六年に訪れる。同年二月、ソ連共産党第二〇回党大会の秘密会でフルシチョフによるスターリン批判演説が行われ、そのテクストは一部修正されて一月後に東欧各共産主義党に送付された。七月にブダペシュトに赴いていたオープトは、そのスターリン批判についてペテーフィ・サークルのメンバーやレニングラード留学時代の同僚と談論したという。

ここで、オープトが当時のルーマニア情況を報告している数少ない文献を取り上げる。その中に間接的ながら亡命に至る理由が読みとれるからである。六八年に発表されたその論文（〔68②〕）は、それまでの一〇年間のソ連－ルーマニア紛争に関する論評で、紛争の起源として五六―六二年に焦点が合せられ、その前半期にはオープト自らが渦中にいた。

ルーマニアの体制は不人気で、五六年初めには重苦しい雰囲気が漂っていた。そしてハンガリーの諸事件に刺激されて、トランシルヴァニアのハンガリー系住民の一部や首都ブカレストのいくつかの地区の労働者や学生の間に、興奮と動揺がみられた。しかし、当初たじろいだ体制指導者たちは情況を掌握した。運動の弱さの原因として以下を、オープトは強調した。ハンガリー、ポーランドでは、反体制勢力は共産主義知識人から、特にスターリニズムの犠牲となり投獄されたことのある幹部から集められた。まさにその種の反対勢力がルーマニアでは少なかった。逆に、党指導者は巧みに党内の潜在的反対者を孤立化させ、沈黙させた。

労働者党書記長ゲオルギュ－デジらの「スターリニズム批判」への対応について、オープトは以下の事実を明らかにする。三月

末、ソ連共産党第二〇回大会について討議し、ゲオルギュ－デジ批判も出てきた党中央委員会拡大委員会の数日後、極秘の会議がもたれた。党、政府、軍並びにブカレストの諸組織の幹部が集められ、ゲオルギュ－デジが主宰した。メモをとることすら禁じられた中で、彼がフルシチョフの一部縮小された秘密報告を読み上げた時、衝撃で出席者は大混乱をきたした。ゲオルギュ－デジは「個人崇拝」の徹底解明を訴えたトリアッティの立場を激しく批判し、続いて断言した。フルシチョフ報告は自党の内部情況に関わりはない。中央委員会の首尾一貫したマルクス－レーニン主義的政策のおかげで、「個人崇拝」の追従者たち〔パウケル、ルカら〕は五二年以来排除されている、と。（振り返ってみれば、それは同報告がルーマニアにおいて「公」にされた唯一の例だった。）

非スターリン化の道を拒んだゲオルギュ－デジ体制の維持・強化の中で、次にオープトが着目するのは、五八―五九年に第二の選択が党指導部によって企てられたことである。

五八年に民族政策が、特に少数民族の地位が大いに変更された。既にこの時までに、共産主義知識人の隊列または党のイデオロギー部門に占めるハンガリー人とユダヤ人の割合は、相当なものになっていた。そのことが四八年以来の旧ブルジョワ知識人への態度を変更させることを可能にした。大学や文化面での役割が認められた彼らは、徐々に権力とも結びついていった。支配機構とブルジョワ知識人との同盟が準備されはじめ、それはルーマニアにおける政治的雰囲気の一特徴となる。それは知識人自身の用語によれば、「啓蒙化されたスターリニズムの勝利」であった。

その同盟は、六二年以来表面化し、六五年に頂点に達する民族主義的一大攻勢を容易にした。党指導部は、経済的利益を守りながら、民族的利益の存在をも自覚し、ソ連との関係では経済的、それ故また政治的な独立の道を歩むことになった。これら内・外の諸要因に条件づけられて党がめざした目標は、近代化だった。そのために産業化のスターリン的モデルが適用された。

かくして非スターリン化の道が閉ざされたルーマニアにおいて、歴史学の要職についていたオープトは、責任ある歴史部門で「ブルジョワ・イデオロギーと修正主義の残滓に反対する」闘争を遂行しなければならなかった。しかし、まもなく彼は、それを不手際かつ不十分にしか遂行していないと非難され、自己批判をせざるをえなくなる。逃れようという考えが、益々彼の頭から離れなくなる。スターリニズムと歴史の歪曲に反対し、国家と歴史学の分離する世界を、彼は西欧に求めた。彼は自らの出版物のいくつかを、パリのまだ見ぬ労働運動史家J・メトロンに送りつけた。メトロンが主宰していたフランス社会史研究所の機関誌『歴史の

アクチュアリテ』〔『社会運動』の前誌〕は、ルーマニアに輸入されていた数少ない歴史雑誌だった。

五八年七月、オープトは二年前に結婚した夫人とともに地中海周遊への参加が許された。彼ら夫妻は、子供なしで許された唯一の組だった。ギリシャ、イタリアを巡り、ニース港に入った船を七月一八日朝、夫妻はあとにした。パスポートは持参できず、八ドルの所持金と何ページ分かの原稿、それがすべてだった。警察に出頭し、ようやく入国が認められた彼らは、その日の晩にパリに向かう。一夜明けてパリに着いた彼らは、奨学金を得てアントニの大学居住区に落ち着くことになる。

そしてオープトはメトロンを探し、訪れ、ルーマニアから送った自分の著作を取り戻した。が、それらの著作が当地の知的世界への名刺代わりとなり、オープト夫妻はメトロンからアンドレ・マルチ文庫の目録作成を委ねられた。五九年六月五日、夫妻はメトロンにその報告書を提出して、最初の報酬を得た。それがフランスにおけるデビューとなった。

亡命後のオープトの活躍は、よく知られている。ここでは経歴だけ触れ、研究業績については章を改めて記す。

六〇年一月一日からオープトは、夫人とともに高等研究院に雇われることになった。その後同院のソ連・東欧研究センターの副部長となり、六九年から部長となる。有力な学界誌の編集委員も務めることになり、六二年から『社会運動』、六三年から『ロシア・ソヴェト世界研究』の各委員を。

オープトの活躍はフランスにとどまらず、六六年のリンツにおける第二回労働運動史家国際会議での共同報告（〔67〕a）をかわきりに、国際会議・シンポジウムでの報告や研究者円卓会議への参加、あるいは客員教授としてのセミナー開催などが続いた。六〇年代末から彼が客員教授を歴任した大学は、ウィスコンシン、ノースウェスト、チューリヒ、ベルリン自由大学、そしてニューヨーク州立大学。

ホブズボームの表現によると、パリはオープトの基地でありつづけたけれど、彼は二大陸を飛びまわった。飛行機で飛びまわる学者となった彼の新しい流浪の時代がはじまった、と。その一つであるレリオ・バッソ研究所スタッフとの打ち合せを終え、七八年三月一四日、ローマ空港で飛行機に乗り込もうとしていた時、彼は突然の心臓発作で亡くなった。

① 主として以下の文献によった。それらからの逐一の注記は、本章では割愛した。J. Maitron, "Vingt ans après...," *Le Mouvement social*, 111, IV.-VI. 1980, 30-32; E. Hobsbawm, "Preface," in: G. Haupt, *Aspects of International Socialism 1871-1914* (Cambridge, 1986), vii-xvii; D. Tomich/A. G. Rabinbach, "Georges Haupt

1928-1978," *International Labor and Working Class History*, 14/15, Spring 1979, 2-5; E. Labrousse, "Georges Haupt historien français du socialisme international," *Cahiers du Monde russe et soviétique*, XIX-3, VII.-IX. 1978, 217-20.

② オープトの引用文献は、刊行年順に一覧を作成し末尾に一括して掲げ、本文ではこのように一覧に付された略記号を用い、そのあとにページ数を加えることにする。

第二章　研　究

第一節　研究テーマ

オープトは亡命後二〇年の間に実に多くを書き、また語った。彼による総合的な主著は書かれなかったけれど、彼は著作を、時には改訂版というかたちで繰り返して、国際的規模で専門誌や論集にふりまくように公表した。[①] その彼の研究は、しばしば試行的、仮説的であった。それは彼の好みと才能が古い問に答えるよりもむしろ新しい問を示唆することにあったからであるが、[②] 彼の問題意識、方法論とも深く関わっていた（第三章）。

オープトの研究の広がりと深さを便宜的に時期、地域、テーマにそれぞれ分けて概観することにするが、その前にいずれも彼の個人的経験に深く関わっていたことに触れておく。

「まえがき」で記したように、ユダヤ人としてマルクス主義者として、いわば二つのカタストローフにオープトは遭遇したわけだが、彼の主たる研究が、一つのカタストローフであった第一次世界大戦勃発時におけるインタナショナルの崩壊についてであり、そのカタストローフの瞬間における労働者・社会主義運動の生き残りに関わっていたことは決して偶然ではない。[③]

また、ナチスによって自らの民族的文化から引き裂かれたばかりか、戦後ルーマニアでの名声ある地位をも放棄して亡命したオープトは、民族と国家という二重の伝統から排除された。そのことがかえって、彼をして本質的なインタナショナリストにさせた。かつてとりわけローザ・ルクセンブルクにそれが期待されたように、東欧と西欧との間の歴史的経験のギャップに橋を架けることが、オープトに期待されてもいた。ホブズボームが指摘するところでは、オープトはもう一つの世界の生き残り、つまり殆ど、といっても全くではないが、歴史の中へと過ぎ去ってしまっている国際社会主義の世界の生き残りとなった。[④]

国際社会主義こそオープトのメイン・テーマであった。以下に記す研究の時間と空間における広がりは、近代資本主義社会が生み出した労働階級の自らの歴史、またその中の社会主義の歴史が彼によって包括的に追究されようとしたことを端的に示している。

オープトの研究領域は、時期でいえば、例外的に一七九〇年時

を扱っているものがあるが、マルクスの時代からはじまり、第一次大戦前夜の第二インター期に力点がおかれ、そしてほぼ二〇年代までを含む。また時事的論評を含めるならば、七〇年代の現代社会主義論やソ連異論派紹介にまで及ぶ。[5] 地域でいえば、研究領域はまさしくインタナショナルで、社会主義の中心から周縁、即ち西はアメリカ西海岸、ブラジル、東はトルコにまで及び、時としてアジア・アフリカの旧植民地にまで及んだ。

研究テーマは、社会主義（マルクス主義）、アナーキズム（バクーニン主義）、戦争、革命、民族問題、植民地問題、国際労働運動、そして「社会主義の地理学」（次節）という視点からの様々な国・地域の社会主義運動、更に亡命インテリゲンツィアや移民労働者にまで及びつつあった。[6] これら列記したテーマは、多様であるばかりか、自発性と独創性に富み、かつ質的深さをもっていた。その上、これらは別々にではなく、絶えず全体性の中で、相互関連の中で追究された。これから節を改めていくつかの研究を紹介していく。

第二節　インタナショナルと民族問題

オープトの整理によれば、第二インタナショナルという用語は以下の三点を包含する。㈠一八七三年から一九一四年夏までの多様な面をもつ国際労働運動の一つの決定的な時期、㈡社会民主主義という総称語で総括される労働運動の一タイプ、そして㈢一制度、つまり一八八九年に具体化した国際社会主義組織を（〔80〕一四）。更に、オープトのより動的な把握によれば、社会主義のインタナショナル史は、社会、労働運動、そしてイデオロギー間の弁証法的な関係に位置づけられるであろう。かかる展望の下に第二インターは、一つの制度としてでも一つの単なる連合としてでもなく、労働者と社会主義者の歴史の進展における一つの時期の根本的な表現として現れる、と（〔64〕九二）。

これこそ伝統的な「上」からのインタナショナル史に対置される、新たな「下」からのインタナショナル史である。主として博士論文（〔64〕）の第四章「方法のいくつかの問題」で呈示され、大いに評判となったこの把握の紹介は割愛することにして、ここではインタナショナルの崩壊問題に立ち入ることにする。

オープトが記すように、第二インタナショナルは理論的に予測された戦争が始まろうとする瞬間に麻痺することになった。あらゆるインター大会で称揚された修辞的なインタナショナルは、現実の試練に耐えられなかった（〔64〕八四）。その理由の解明はまず、彼の博士論文の根底で意図されていた。続く独語改訂版（〔70〕）で、その問題は正面から、表題にまでなった「綱領」と「現実」

との乖離という観点から鋭く分析された。

更に、『開かれなかった大会』（(65)）の英語改訂版『社会主義と大戦――第二インタナショナルの崩壊』（(72)）では、新たに総括的な最終章「戦争か革命か」が加えられたのだが、その中でオープトは、インタナショナルの崩壊をより包括的に捉えようと試み、とりわけ社会史的分析を駆使して有力テーゼを提出した（詳細は別稿⑦参照）。そして本テーマに関するオープトの追究は、亡くなる直前まで続いた。それはより広い展望の下で新たなアプローチも加えた再解釈の試みであった。それは「社会主義とサンディカリズム　国際的次元における党と組合の関係――一つの変化か」（(81)）であり、元々「ジョレスと労働階級」に関する会議の報告であったそれをオープトは何度も手直しし、最終稿を提出した日にローマに発ち、帰らぬ人となった。

その中で最初に、オープトは問題提起を行う。政治と経済の分離は、第二インター時代に明確化する近代労働運動の基本的特徴であろうか。いつ、どこでその分離は起こったか。いかなる形態で、いかなる精神の下でか、と。かかる問の下に、労働運動のそれぞれの制度的表現となった社会主義政党と労働組合との分裂、更にそれぞれの運動の展開の相違が、社会史的アプローチも加えられて分析された。即ち（詳述する余裕はないが）、一九世紀末の労働組合運動と社会主義運動の分離・別展開を背景に、一九〇〇年以降のインター各大会においては、それまで政党とその重要性と役割に関して同等であった労働組合が格下げされるようになった。そして大戦前までに労働運動は、三つの構成要素、即ち組合、党、そして社会主義に投票だけする選挙民に分かれてしまった。

かかる分析を踏まえて、オープトはインター崩壊について再解釈を試みる。大戦前夜に例えばドイツ社会民主党ＳＰＤが追いやられた窮地は、改革か革命かという戦術的選択を前にしての躊躇の単なる結果ではない。それは労働階級の構成内に起こった変化の結果であった。ＳＰＤは、組合側からの増大する要求を受けとめられず、労働運動の現実に起こった深い社会的変化を殆ど感じとれなかった。

結びでオープトは、〇七年インター大会でのドゥ・ブルケールの訴えを引用する。「組合と社会主義政党との関係は、良き隣人の関係で単にあるだけでなく、行動における統一をまた追求すべきだ。親密な関係と組織関係の確立、それはそこでは空疎な考えではない。」ジョレスこそ、その統一の上に彼の平和の全戦術を築くことをめざし、またそこに「戦争に対する戦争」における労働階級の動員の唯一の保証をみていた、と捉えるオープトは次のように結んだ。しかし、求められた行動の統一は実現しなかった。

その結果は、党と組合との間の権限をめぐる闘争を予感させる以上にはるかに重いものであった、と。

ここまでくれば、オープトにとってインタナショナルの崩壊の問題は、今後の労働運動の発展可能性の問題につながっていく。その追究は彼の死によって断たれたのだが、少なくともその直前の労働運動史の方法論的研究では今一歩先に進みえた(第三章)。

次に、オープトの民族問題に関する研究をみていくが、それは彼のインタナショナル研究にとって不可避だった。帝国主義時代の民族・植民地問題を、インタナショナルを軸に彼は追究した。但し植民地問題については、彼は論文集『第二インタナショナルと東洋』(〔67〕)を共編し、また、ヨーロッパ中心主義への反省として、我々が戦争の危険の問題を取り扱う時植民地問題を全く除外することのできない植民地主義の全問題がある、と指摘するけれど(〔74〕d一三八)、彼自身の取組は本格的なものにはならなかった。それ故、その問題への批判的論評にもかかわらずドイツ、イギリス、ベルギーの各植民地についての研究がオープトに欠けている、とのロベールの指摘に対して、⑧そのことが本質的問題かどうかは確かめがたい。

オープトの民族問題に関する主研究は、第二インター時代の民族問題をめぐるマルクス主義思想の変化・発展をグローバルな社会的発展と関連づけて理論的に考察したもので、ローザ・ルクセンブルク、カウツキー、バウアー、レーニンらの論に光があてられた(〔74〕、〔74〕a)。三つの時期に分けてのその考察を、少しく紹介する。

㈠一九世紀末の段階では、民族問題への無関心や拒否がインター指導者のメンタリティで、それ故に彼らの唱えるインタナショナリズムはユートピア的すぎた。そこから現実認識を踏まえてルクセンブルク、カウツキーらによって、かつてのマルクス・エンゲルスの立場と相反するような民族論が展開されはじめる。㈡〇五年革命を契機に、マルクス主義思想がこの新たな局面を捉えようとする。が、その前に資本主義が帝国主義へと転換を遂げる。その結果、社会主義の地理的分布が未だヨーロッパに限られているのに対し、帝国主義体制は「歴史なき民」やヨーロッパ外の植民地での民族解放運動にエネルギーを与えつつあった。かかるずれによって労働運動の視野は条件づけられ、その拡大・深化は未だ望めなかった。㈢戦争の危機が高まる大戦前夜、帝国主義時代における民族問題、という新たな見直しがルクセンブルクらにとって急務となる。が、それは問題を民族次元にとどまらせず、帝国主義の根本問題にまで行きつかせる。他方、労働運動の側にとっても、民族問題は自らの内的ダイナミズムの要求によって認知

されるようになり、民族運動は社会革命との関係で動的に捉えられるようになりつつあった。そこに、大戦が立ちはだかった。

その大戦勃発時に直面した問題もそうだったのだが、民族問題をオーブトが論じる際絶えず留意したのは、ナショナリズムとインタナショナリズムとのパラドクスであった。彼はハンガリー系のルーマニア人かつユダヤ人として、ナショナルな伝統のディレンマに自ら敏感であらざるをえなかった。その一方で、一九世紀後半のルーマニア労働運動の形成に関する研究で彼が強調したものの一つに、民族的な知的伝統があった。それ故にとりわけスターリン時代に支配的となった偽インタナショナリズムこそ、イデオロギー的均質化の下に民族的文化の生きた現実を否定するものとして批判された。そして具体的歴史研究の次元でオーブトがめざしたのは、ラブルースが提唱していた「社会主義の地理学」である。[9]

ラブルースがフランスにおける左翼の地理的分布を一世紀間の三つの局面で考察したのに対して、オーブトはその「社会主義の地理学」をインタナショナルな次元にまで拡大した。その概念でオーブトが訴えたのは、社会主義の比較史を可能にし、またその発展における共通性を捉えることだけではなく、その一方で各地域、各民族におけるその特殊性や相違をそれ自体として捉える必要であり、かかる相違の理解にたってはじめて総合的認識は可能となるとする個別から普遍への視点である。更にはホブズボームを援用してオーブトは、各労働運動を世界史の中へ組み入れ、そしてその発展をその時期の経済・精神・社会史の全体的発展に関わらせて捉えようともした（〔75〕、〔70〕一三一）。オーブトの最後期の、より深められたその実際の研究を、節を改めてみていく。

第三節　最後期の研究

オーブトの死は突然で、彼自身にとって予期されたものでなかったが故に、死の直前の研究を最後期のそれと括ってしまうのには無理がある。にもかかわらず、何らかの括り方をしたくなるようなものを私は感じている。それを仮説的に説明したい。

最後の数年間オーブトは運動の「根本」を探した、とイェムニッツは記している。[10] そのように、一方では、決して楽観視できない労働運動の現状認識を踏まえて、オーブトは労働運動史研究の今後の可能性について方法論的に根本的な問を発し、その解答を試みた。そのことについては、次章でまとめて考察する。

もう一方では、オーブトは研究領域を拡大し、多様化させていた。それは欧米での六〇、七〇年代の労働運動史研究の新たな成果を積極的に摂取しようとした彼の姿勢にも関わっていた。その

ような中で私が着目するのは、バルカンへの回帰といいうるような一種の収束が彼の研究にみられるように思えることである。バルカンは亡命前の彼の研究領域であったが、亡命後西欧での彼の一連のデビュー作はそれとは対照的なインタナショナル研究、しかも第二インターの事務局ＢＳＩを中心に据えての包括的な研究であった。それでも、「社会主義の地理学」の観点からバルカン研究の必要性は持続し、実際に多角的な研究が高等研究院でのオープト・セミナーで進められていた。[11] けれど、最後期のバルカン研究への傾倒は単純な回帰ではなく、新たなアプローチや方法論を積極的に導入してより深い研究が進められつつあった、と私は捉える。以下、それをみていく。

他の誰が本稿を書きえただろうか、とホブズボームによって評された「『指導的党』か――第二インター時代におけるドイツ社会民主党の東南ヨーロッパへの影響」（(79)）では、マルクス主義イデオロギーの影響が社会史的・数量的分析をも駆使して以下のように解明された。

当地の社会主義運動にとっては、経済面での後進性の故にイデオロギー面での活動が主要闘争手段となった。そこでは、教義への忠実が志向されることによって正統派的見地が採られ、修正主義的逸脱から自らを守ろうとするようなイデオロギー的非妥協性が貫かれる。そのモデルがＳＰＤに求められるのだが、そのような「指導的党」の理想化は何よりもまず、自分たち社会主義政党の存在を正統化するために必要とされた。マルクス主義政党の「理念型」へと高められたＳＰＤは、小社会主義諸党のための正統化の源となった。かかるイデオロギー的傾向性こそが、ロシアとフランスの文化的影響力がそれぞれ支配的であるブルガリアとルーマニアにおいて、なぜＳＰＤの精神的影響力がそれほどまでに強かったかを理解させる。[12]

次にみるのは、オープトの亡命インテリゲンツィア研究である。第二インター期の国際的指導者の多彩な面々、即ちジョレス、ヴァイアン、レーニン、ユイスマンス、ルクセンブルクらが、オープトの考察の対象となった。が、最後期に近づくにつれて、指導者の中でも、国家間を移動するか数ケ国で時をほぼ同じくして活躍した、またナショナルなものより主義に献身した活動家の解明に力が入れられた。[13] そこには、オープトの亡命者としての共通性が読みとれるかもしれないが、より着目すべきは、東欧社会主義者へのまなざしである。

オープトは「革命的インテリゲンツィアのイメージの普及における亡命の役割」（(78)b）の結びで、次のようにまとめた。革命的インテリゲンツィアは、人民の中での経験によって自らの積極

的行動主義を強化した。また、革命的知性は自らに属するとの意識も強化した。政府の弾圧が彼らに自らの大義と正当性を確信させた、と。インテリゲンツィアという語が革命や社会主義の概念と再び同一視され、また彼らの組織が「革命的」とか「社会主義的」とかの形容詞が付されるようになった一八七〇年代からの研究をオープトは始めたのだが、本稿を導入部として、それぞれルーマニアとイタリアの労働運動の形成に重要な役割を果たした亡命ロシア人インテリゲンツィア、C・ドブロジャーヌ－ゲーリアとアンナ・クリショーフの研究が進められつつあった。亡くなる数ヶ月前もオープトは、イタリア研究者を前にロシア系ユダヤ人で、ルーマニア労働運動の創始者の一人となった前者のプロフィールを呈示したという。[14]

クリショーフを例に、オープトは次のように捉えた（〔78〕c）。彼女の例は、労働運動の中でよく知られてはいないがしかし無視できない次元の存在を歴史家に喚起させる。政治亡命は、一九世紀においては革命思想の古典的な仲介役を果たした。亡命ロシア革命家にとって外国は、単なる避難所にとどまらず、彼らの戦闘的活動の範囲内でもあった。要するに、個人であれ集団であれ、突発的であれ固く組織されてであれ、一時的であれ永続的であれ、ロシア人であれその他であれ、亡命者こそ第二インター時代の思想の流布の推進要因であった、と。

更にオープトは、ついに公表には至らなかったが、C・ラコフスキの研究、伝記、そして文献目録を準備していたという。[15] 同じく準備していたというフランスへの亡命ロシア人Ch・ラポポールの伝記の場合とともに、我々に改めてオープトの死を痛感させる。

実は、クリショーフ論文（〔78〕c）は亡命インテリゲンツィアの枠を越えて、より底辺の移民労働者の考察にまで達していた。オープトの最後の新テーマとなった未完の考察を、以下みていく。

オープトは『プルリエル』誌を舞台に、移民労働者研究にも着手した。移民労働者への社会主義の普及に関する研究にとどまらず、移民自体の政治意識の形成さえも捉えようとした。彼によれば、あらゆる移民はメンタリティの変化によっても、また代わりに母国への彼らの効果によっても、根本的に政治的たらざるをえなかった。[16]

クリショーフ論文で提起された問題はこうである。一九世紀末の国際労働運動の拡大・均質化と大衆の移民運動との間に関係はあるのか、それとも単なる同時併存の問題か、と。オープトによれば、国際的な労働者移民について我々の知識は未だ限られているが、しかし第一次大戦前の労働階級の誕生と発展に深く影響を及ぼした労働者移民の複雑な現象の深い理解なしには、我々はい

かなる仮説的答も与えることができない。それほどまでに政治亡命者同様、移民労働者の果たしたであろう役割が強調される。

オープトは続ける。元来、労働界への社会主義の普及は「輸入」の現象である。問題は職工、熟練工らの行動である。徒弟時代の間に彼らはヨーロッパを巡って、外国の地で組織された労働運動に接し、その時かなりの者は社会主義思想になじみ、その中に入っていく。かかる労働者移民の役割は、南北両アメリカという新世界においても多様なかたちで果たされる、と。ここには、第二インター時代の労働運動史の新たな捉え直しの可能性を予感させるものがある。

① オープトの著作目録は以下の追悼号に掲載されている。*Le Mouvement social*, 111, IV.-VI.1980, 255-68. それとて完全からほど遠いものだが、以下の編注は傾聴に値する。編者として多くの場合、どの論文が他のどの論文から訳されたかの確定作業を諦めねばならなかった。なぜならオープトは論文を公表する前にしばしば別の言語で新たに本文を手直ししたし、またそれらの点検は常に正確になされえたわけではなかった、と。

② Cf. Hobsbawm, xii.

③ Cf. Tomich / Rabinbach, 2; A. Rabinbach, "Georges Haupt: History and the Socialist Tradition," *Le Mouvement social*, 111, 79.

④ Hobsbawm, viii.

⑤ 本章の付論として「ソヴェト社会主義論」を準備していたが、規程枚数との関係で割愛せざるをえなかった。

⑥ Cf. Tomich / Rabinbach, 3; Labrousse, 220.

⑦ 山内昭人「戦争と平和、そして革命の時代のインタナショナル史研究——西川正雄著『第一次世界大戦と社会主義者たち』によせて——」『現代史研究』三六号、一九九〇年一二月、六三—七六。

⑧ J.-L. Robert, "Georges Haupt," *Cahiers d'histoire de l'Institut Maurice Thorez*, 25-26 (53-54), 1978, 261.

⑨ Cf. Rabinbach, 78-79; Tomich / Rabinbach, 4; E. Labrousse, "Géographie du socialisme," *La Revue Socialiste*, 1-2, VI. 1946, 137-48.

⑩ J. Jemnitz, "Le feu ardent de l'histoire," *Le Mouvement social*, 111, 49.

⑪ Cl. Weill, "Le seminaire de Georges Haupt à l'Ecole des Hautes Etudes," *ibid.*, 38-39.

⑫ なお、そのSPDが及ぼした影響力の典拠ともなるカウツキーと当地社会主義者間の書簡集が、オープトらによって編集され、彼の死後公刊された([86])。それによって我々はまた、西欧中心的社会主義とは異なる社会主義世界へと深く立入れる思いがする。

⑬ Cf. Hobsbawm, x-xi.

⑭ F. Marek, "Georges Haupt et la crise du marxisme," *Le Mouvement social*, 111, 53-54.

⑮ M. Bernstein, "Tout comprendre, tout expliquer," *ibid.*, 24.

⑯ Cf. R. Gallissot, "De l'étude des migrations ouvrieres à la revue《Pluriel》," *ibid.*, 26-27; Pluriel, "A Georges Haupt," *Pluriel*, 13, 1978, 4.

第三章　方　法　論

第一節　テクスト・クリティークとプロブレマティーク

オープトの研究で誰もが最初に驚くのは、驚異的なまでに習得されたヨーロッパ諸言語を駆使して獲得された、原文主義者といわれるほどの文献学的博識である。

既述のように、亡命後の最初の仕事も文献目録作成だったし、西欧学界誌へのデビューもまた文献案内、つまりソ連で刊行されてきたロシア近・現代史に関する文献目録類の概観だった（〔60〕）。更にオープトは、アムステルダム、ミラノをはじめヨーロッパ中の文書館を渉猟し、再発見した原史料を信頼に足る批判的編纂を経て公刊した（例えば〔63〕、〔65〕、〔69〕）。

そのテクスト・クリティークの徹底性が、第二インターの史料目録（〔64〕）で強烈に示された。その中で、第二インター関係の印刷物の異同が逐一吟味され、完全という言葉が決して遠いものではないとの印象を与えるほどの史料目録が、それぞれ所蔵図書館も明記のうえ作成された。

そればかりか本書は、ラブルースによる序文の中で指摘されたように、ただ単に史料の一覧表にとどまらず、諸問題の一覧表でもあった。オープトは強調する。史料の探求と整理は、ドキュメンテーションの面から不可欠であるばかりか、方法の面、例えば労働者・社会主義運動についての歴史研究のまさにそのプロブレマティークの拡大の面からも等しく不可欠である、と。

かかる観点からオープトは「プロブレマティーク」という用語を重視する。彼の口からしばしば発せられる「科学的」という語の意味は、彼にとってまず第一に、史料への忠実をさし、それを前提としてその上に、「プロブレマティーク」であった。後者は問題提起的とか問題史的とか訳しうるような意味で、史料の探求にしろ分析にしろ、そこには実証主義的伝統にとどまらず、絶えず「プロブレマティーク」な姿勢が、別言すれば、本質的な問題を追いつづけようとする姿勢があった。

オープトは言う。もし歴史的経験の再発見や利用が、その過程において歴史的諸現実の全体性を否定することなしに現在の諸問題に取り次がれないならば、意味ある歴史的伝統はありえないだろう、と（〔78〕a二四、〔80〕四〇）。史料が容易に近づきうるようなテーマは彼の選ぶところとはならず、また小集団の研究もそれ自体としては彼の興味を満たさず、それを社会主義や労働運動の歴史の大論争の中に挿入しようと彼はした。①

第二節　「なぜ労働運動史か」

「プロブレマティーク」を強調するオープトにとって方法論的考察は、博士論文（〔64〕）以来絶えず繰り返されるものであった。死の直前の論文「なぜ労働運動史か」（〔78〕a、〔80〕一七―四四）こそ、「オープトの生涯と業績にとって中心的であった関心を反映し」②たもので、以下それをもとに、そしてその初稿とも解される報告「社会史と正統化の学問との間」（〔74〕c）なども加えて、彼の方法論を検討する。

オープトは次のように書き出す。六〇年代初め、労働運動史家は労働史の認知という深い変化の始まりを目撃した。その時以来、E・P・トムスン、E・ホブズボーム、R・トランペ、M・ペロらによる方法論をめぐる議論が、労働史への伝統的なアプローチに疑問をなげかけ、新しい方向性が与えられた労働史は、社会史と結びつくようになった。かかる労働運動史研究の隆盛にもかかわらず、なお否定しがたい不安が感じられる。その証拠は明らかだ。今やアカデミックな専門となった労働運動史は、戦闘的労働者の中にわずかな読者しかもっていない。世評を得るやその著作は、本来向けられるべき人々へ訴える力を失ったのだろうか。あるいは、労働運動が自らの過去に無関心になってしまったのか。歴史家はこれを無視することはできない。誰のために、この歴史はめざされるのか。その目標は。

それへの解答を求める前にオープトは、伝統的労働運動史の限界についてみていく。労働運動の自らの歴史への関心は、運動自体の出現とともに現れた。一九世紀末までの創成期において、その歴史は戦闘的労働者自身によって書かれ、そしてそれは、歴史研究への情熱に劣らぬほど彼らの運動への傾倒に動機づけられた。彼らのイデオロギー的立場の要求に従属させられて、歴史は書かれた。かくして労働運動史は、一つのイデオロギーへと変形された。正統化の源とみなされることによって労働運動史は、正統化、自己正当化の一道具へと変形され、その歴史の本質的機能はイデオロギー的となった。

この労働運動史の「神話化」のプロセスは、一九二〇年代から制度化された形態を見い出した。即ち、第二インター崩壊の結果として起こり、ロシア十月革命によって深められた大分裂によって、労働運動史は敵対する指導者たちによって押収され、それぞれの要求に従属させられた。そこでは労働運動史は「運動の様々な分派間のイデオロギー論争の本質的構成要素」（H・―J・シュタインベルク）となり、運動内の敵対者間の武器となった。それこそとりわけスターリン時代において、党官僚によってつくられ

たイデオロギー的構築物の基礎となる「正統化の学問」となった。その時歴史は、（労働運動の生きた経験の総計でもある）集団的記憶、階級意識の源泉、そして実践の反映であることをやめた。

インタナショナルな次元においてもまた同様だった、とオーブトは続ける。今日、インタナショナルにおけるプロブレマティークに敏感な歴史家は殆どいない、がオーブトにいわせると、このインタナショナルな次元は本来、労働運動の豊かで複雑でかつ本質的な部分であり、また社会主義の発展への接近方法でもある。にもかかわらず国際的社会主義もまた、正統化の必要不可欠な源に、更には単なる参照へと還元されてしまった。そのことによって制度としてのインタナショナルが、国際的規模での労働運動に取って代わった。そして、支配的潮流の敵対者は制度から排除され、国際的労働運動の外におかれた。

続く困難として、また解答の緒として取り上げられるのは、労働運動がそれ自体の歴史の二重の利用を要求するところの二重の要請に直面していることである。一つは実践としての労働運動史であり、それは失敗と成功を伴う実験場として、あるいは理論的、戦略的実験場として要求されている。それはまた、歴史的経験は唯一の教師である（ローザ・ルクセンブルク）という観点からも、他方、支配や正統化のためのイデオロギー的基礎としての利用という観点からも、ともに要求される。

もう一つは伝統としての歴史であり、それは正統化やイデオロギー的論証の源として利用されてきた。が、もう一つの側面をオーブトは見落とさない。即ち、伝統は維持・伝達されることによって集団の結合力や持続の一要素、動員要因、そして集団的記憶や階級意識を育む生き生きとした源となるということを。ここに伝統に割り当てられる機能に関する二者択一が、我々に迫る。過去を追い払うか、それとも、それを批判的省察や参考のまさにその中心におくかが。

実践としての歴史と伝統としての歴史のそれぞれの要請は、一部は重なり合い、一部は互いに補い合うか矛盾し合う。いずれにせよ、労働階級にそれ自身の過去は返還されねばならず、その明晰でグローバルな知識が求められる。労働階級の歴史への省察は、それ自身のアイデンティティの省察であるのだから。かくして労働運動史によって提出された根本問題は、信仰することではなく、知ること、即ち行動するために理解することである。

このように労働階級のその運動の歴史的諸経験が実践的意図において調停されることは決して妨げられないと考えるオーブトは、実践へ通ずる歴史記述に達するために、いかに労働運動についての探求領域を拡大すべきか、を更に論ずる。その問に答えるため

には以下の方法論的前提が成立しなければならない、と彼はみる。即ち、一元的歴史を放棄して、労働運動史についての探求を進歩的な歴史記述の全般的傾向に適合させること（〔74〕c二七一―二）。

そのために何よりも求められるのが、「教義的レンズ」の除去である。その除去は認識論的な面でも、またドグマあるいはイデオロギー的な面でも求められるのだが、そのために以下のアプローチが必要である、とオープトはみる。第一に、労働運動の史料が明らかにされ、広く利用されなければならない。次に、「教義的レンズ」の起源はたどられなければならない。とりわけ、マルクス主義を教義にまでさせた第二インターにおける「綱領と現実」との間の分離に対して。そして最後に、歴史著作は（六〇年代以来社会科学によって開拓されてきた）広汎な分析的カテゴリーを発展させなければならない、と（〔70〕一一九―二四）③。

ここまできてようやく、労働運動の多面的な歴史への道が拓かれる。その時オープトが強調するのは、その実践的意味である。即ち、新しい労働運動史と伝統的な歴史との対決は、ただ単に不毛なアカデミックな論争や抽象的な方法論的論争ではなく、それは新しい労働史のための闘争であり、歴史的知識の問題をも超える、と（〔78〕a二七、〔80〕四四）。かかる強調は、彼が最後までマルクス主義歴史家であることに深く関わっていた。

第三節　社会史と批判としてのマルクス主義

オープトは『第二インタナショナル』の独語版で、研究対象が国際的な労働運動の「社会史」であることを明記した。しかしその際、次のことを彼は自覚していた。「労働運動と社会主義の歴史は、単なる社会史の副産物ではない。それはその内的メカニズムと推進力の機能としてその特殊性において捉えられねばならない。そうすることによって人は、理論の意義とイデオロギーの役割を考慮に入れる。」（〔70〕一一、一二五）

社会主義は、まさしく理論を通して世界を変える熱望である。それ故に、独語版では「綱領と現実」の間の変化する関係がいかに決定的な問題であるかが、オープトによって提起された。また、彼の研究の一特徴となったのが、労働者・社会主義運動内のランク・アンド・ファイルよりもむしろ国際的な指導者グループの研究である。彼らによる教義や綱領をめぐる論争は、運動にとって特別で重要な意味をもった。彼らにとって理論は、政治的行動の指針でもあったからである④。

オープトは亡くなる直前にいわば原点に帰って、マルクス主義の概念がいかに、なぜ発生し、いかに広まり、そして、いかに使用されたか、を歴史的経過を踏まえて理論的に考察した（〔82〕、

その早期の版が〔78〕。その中で強調されたことに、「マルクス主義」という語がカウツキーらにとって綱領的な価値をもっていたことがある。その語はイデオロギー・政治的闘争の一つの武器として作用した。既にオープトによって、政治闘争もまたしばしばイデオロギー闘争に変装して展開された格好の例として、ボリシェヴィズムの歴史が考察されていた。[5]

ここでまた、オープトによるもう一つの社会史の定義を取り上げる。即ち、「社会史は『庶民』の歴史でも日常生活の歴史でもなく、労働者階級のミクロな歴史でもなく、それはむしろ歴史への一つの方法、一つの態度であり、その際、力点は唯物論的歴史観におかれている。」更に、「唯物論的歴史記述の役割の問題は、正統性か非正統性かの問題ではなく、この歴史記述が批判的なものでありうるかどうか、労働階級に役立ちうるかどうかにある。」（〔74〕c 二九二）それほどまでに彼は、社会史家の範疇をはみ出し、ミリタンといいうるほどの戦闘的マルクス主義歴史家として、批判としてのマルクス主義にこだわった。

例えば、ストライキの分析に際しても、オープトはそれが急進的かそれとも防衛的かの判断を下すことにこだわったのだが（〔74〕d 一八三）、そこにはまた社会史を実践する可能性が意識されていたからである。[6] また、死後公表された「いかなる意味で、またどの程度、ロシア革命はプロレタリア革命か」（〔79〕a）[7]はオープトの暫定的ながら唯一といってよいロシア革命論なのだが、その中でもマルクス主義的批判の立場から、彼独自の強調点が以下のようにあった。

オープトはいわゆる複合革命論の立場からロシア革命を捉える。即ち、都市革命（そしてその中の労働階級革命）はもちろんだが、一九一七―一八年で最もダイナミックで爆発的な現実を捉えるためには、農業革命と諸民族の革命を見落としてはならない。レーニンの戦略は、三つの勢力である労働階級運動、農民運動、そして諸民族運動をボリシェヴィキ党のヘゲモニーの下に結合させることであった、と。その上に、オープト独自の強調が続く。政権を掌握したボリシェヴィキにとって大問題は、彼らがパリ・コミューンより長く権力にとどまれるかどうかだった。政権七五日目にレーニンは、「我々はパリ・コミューンより三日長く既に政権にいる」と演説したが、[8] それは単なる逸話ではなく、ロシアにおけるプロレタリア革命の分析にとって中心問題である。即ち、この革命は世界革命の展望の下にのみ考えられた。ロシア革命が社会主義的であるかどうかは、ロシアが巨大な帝国主義体制の一部であるという事実に関わっていた。それ故、そのことはヨーロッパのプロレタリアートが運動に続くかどうかにかかっていた。革命

的諸事件は、先進国の産業労働者階級を巻き込もうとしていたが故に、プロレタリア的性格をもちつつあった。

一九一七―一八年のロシア革命は何であったか。それはまず第一に、今世紀最初の人民革命の一つであった。しかしその時、なぜこの人民革命はプロレタリア的衣服をまとったのか。なぜその自己イメージや正当化は、プロレタリア革命のそれであったのか。かかる問にオープトは、むしろ伝統的な見地から、その数年間全体の脈絡で答える。即ち、大戦後のヨーロッパは急進化の時代だった。すさまじい反資本主義、反ブルジョワの感情があった。人々は革命をもたらしうる社会的力を求めていた。プロレタリアートこそ、その力になろうとしていた。歴史的使命をもつ階級としての労働階級という考えは、ヨーロッパ左派の中に広く広まっていた。それ故、ヨーロッパにおける様々な共産主義政党の形成は、接木ではなかった。それはむしろ、ロシア革命というイメージ化されたシンボルとともにヨーロッパにおける変化の希望とヴィジョンの中に集合したものであった、と。

しかし、とオープトは続ける。革命ロシアの方では、レーニンがかかる世界革命へと連なる戦略をソヴェト－ポーランド戦争敗北後の二一年にではなく、既に一八年に完全に変えてしまった。レーニンの二者択一的戦略は、上記の三つの革命を結合させつづけることに益々専念していった、と。

表題からみて社会史的・数量的分析が予測され、確かにその分析が本稿にみられるけれど、むしろかかる強調で本稿が結ばれたところに、私はオープトの研究姿勢をみる。大戦直後のヨーロッパ的規模でのプロレタリア革命の客観的可能性、それについての考察と結びつけられてこそ、ロシア革命がいかに「プロレタリア的」であったかの説明が果たされる、と彼は捉えた。

最後に、オープトがマルクス主義の再生をめぐって考察しつづけたことに触れる。論文「今日マルクス主義は再生か停滞か」（〔74〕b）の中で、彼は問う。今日なお、マルクス主義はアクチュアルか、と。更に深く問うならば、いかにマルクス主義は、複雑で可動な世界を解釈してきたか。いかにマルクス主義は、革命的変革を招くためにその組織形態、戦略、理論を更に発展させてきたか、と。

当然、かかる問への答が容易に得られるものではない。彼が確認したのは、今日のマルクス主義の紛れもない矛盾と限界であり、その再生が不可避であるということである。その再生をめざす彼が結びで今後に向けて問うのが、こうである。しかしながら、世界を解釈するだけでなくそれを変えるために、異なる体制において示された選択の可能性が、当今あるのか、と。

生涯を通じてオーブトが関ったのは、インタナショナルな規模での労働運動史の「市民権」の獲得だった。その際、学くの関心とは別のもう一つの影響が絶えず彼の思考の中にあった。たとえそれが時に矛盾していたかもしれなくとも、それは純粋な学としてではなく、批判としてのマルクス主義の影響だった。⑨

① Cf. Rabinbach, 76; Jemnitz, 49; Weill, 41.

② Tomich / Rabinbach, 4.

③ Cf. Rabinbach, 77–78; Tomich / Rabinbach, 3–4.

④ Cf. Hobsbawm, x, xii–xiii.

⑤ 参照、山内昭人・本秀一「『ボリシェヴィズム』という用語について——編訳とまえがき——」『宮崎大学教育学部紀要』（社会科学）、六〇号、一九八六年九月、一—一九。

⑥ Cf. H. Steiner, "Georges Haupt et les Rencontres internationales des historiens du mouvement ouvrier à Linz," *Le Mouvement social*, 111, 62.

⑦ 本稿は、フェルナン・ブロデル・センターでのセミナー報告をI・ウォラーステインが論文化したもので、表題は指定されたものだった。

⑧ 正確には、一八年一月二四日、第三回全露ソヴェト大会でレーニンは、二ヶ月と一五日間はパリ・コミューンの期間よりわずか五日しか長くない、と演説した。

⑨ Cf. Rabinbach, 76.

G・オーブト引用文献一覧

〔60〕 G. Haupt, "Ouvrages bibliographiques concernant l'histoire de l'U. R. S. S.," *Cahiers du Monde russe et soviétique*, I–3, IV.–VI. 1960, 502–12.

〔63〕 ——(éd.), *Correspondance entre Lénine et Camille Huysmans 1905–1914* (Paris / La Haye, 1963), 165p.

〔64〕 ——, *La Deuxième Internationale 1889–1914. Etude critique des sources. Essai bibliographique* (Paris/La Haye, 1964), 393p.

〔65〕 ——, *La Congrès manqué. L'Internationale à la veille de la Première Guerre mondiale. Etude et documents* (Paris, 1965), 299p.

〔67〕 ——/ M. Rebérioux (éds.), *La Deuxième Internationale et l'Orient* (Paris, 1967), 493p.

〔67〕a B. Andréas / ——, "Bibliographie der Arbeiterbewegung heute und morgen," *International Review of Social History*, XII–1, I.–III. 1967, 1–30.

〔68〕 ——, "La genèse du conflit soviéto-roumain," *Revue française de science politique*, XVIII–4, VIII. 1968, 669–84.

〔69〕 ——(éd.), *Bureau Socialiste International. Comptes rendus des réunions. Manifestes et circulaires.* Vol. I : 1900–1907 (Paris / La Haye, 1969), 438p.

〔70〕 ——, *Programm und Wirklichkeit. Die internationale Sozialdemokratie vor 1914* (Neuwied / Berlin, 1970), 256S.

〔72〕 ——, *Socialism and the Great War. The Collapse of the Second International* (Oxford, 1972), ix, 270p.

〔74〕 ——/ M. Lowy / Cl. Weill, *Les marxistes et la question nationale 1848–1914. Etudes et textes* (Paris, 1974), 395p.

〔74〕a ——, "Dynamik und Konservativismus der Ideologie. Rosa Luxemburg und der Beginn marxistischer Untersuchungen zur nationalen Fragen," in : Cl. Pozzoli (Hg.), *Rosa Luxemburg oder*

Die Bestimmung des Sozialismus (Frankfurt a. M., 1974), 219–70.（「ローザ・ルクセンブルクと民族問題」山内訳所収、エ・ベンヤ他『ローザ・ルクセンブルク論集』〔河出書房新社、一九七八〕一八〇—二二五）

〔74〕b ——, "Renaissance oder Stagnation des Marxismus heute?" in: *Geschichte und Gesellschaft. Festschrift für Karl R. Stadler zum 60. Geburtstag* (Wien, 1974), 331–48.

〔74〕c [—— et al.] "Zwischen Sozialgeschichte und Legitimationswissenschaft. Protokoll einer Tagung über Geschichtsschreibung der Arbeiterbewegung in Frankfurt/M (Nordweststadt) am 17. Februar 1974," *Jahrbuch Arbeiterbewegung*, II (Frankfurt a. M., 1974), 267–300.

〔74〕d ——, [Diskussion] *Internationale Tagung der Historiker der Arbeiterbewegung* ("*VIII. Linzer Konferenz*" *1972*) (*ITH-Tagungsberichte 6*) (Wien, 1974), 136–38, 182–84, 229–32.

〔75〕 ——, "Zur Problematik 'Geographie des Marxismus.' Einige Bemerkungen," *ibid.* ("*IX. Linzer Konferenz*" *1973*) (*ITH-Tagungsberichte 7*) (Wien, 1975), 35–46; [Diskussion] 252–53, 268–69.

〔78〕 ——, "Zur Begriffsgeschichte des Wortpaares 'Marxist' und 'Marxismus,'" *Forschungen zur osteuropäischen Geschichte*, XXV, 1978, 108–20.

〔78〕a ——, "Why the History of the Working-Class Movement?" *New German Critique*, 14, Spring 1978, 7–27.

〔78〕b ——, "Rôle de l'exil dans la diffusion de l'image de l'intelligentsia revolutionnaire," *Cahiers du Monde russe et soviétique*, XIX–3, VII.–IX. 1978, 235–49.

〔78〕c ——, "Emigration et diffusion des idées socialistes: l'exemple d'Anna Kuliscioff," *Pluriel*, 14, 1978, 3–12.

〔79〕 ——, "'Führungspartei'? Die Ausstrahlung der deutschen Sozialdemokratie auf den Südosten Europas zur Zeit der Zweiten Internationale," *Internationale wissenschaftliche Korrespondenz zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*, XV–1, III. 1979, 1–30.

〔79〕a ——, "In What Sense and to What Degree Was the Russian Revolution a Proletarian Revolution?" *Review* (Fernand Braudel Center at the State University of New York, Binghamton), III–1, Summer 1979, 21–33.

〔80〕 ——, *L'Historien et le mouvement social* (Paris, 1980), 343p.

〔81〕 ——, "Socialisme et syndicalisme. Les rapports entre partis et syndicats au plan international: une mutation?" in: *Jaurès et la classe ouvrière* (Paris, 1981), 29–66.

〔82〕 ——, "Marx and Marxism," in: E. J. Hobsbawm (ed.), *The History of Marxism*. Vol. I: Marxism in Marx's Day (Brighton, Sussex, 1982), 265–89.

〔86〕 ——/ J. Jemnitz / L. van Rossum (Hg.), *Karl Kautsky und die Sozialdemokratie Südosteuropas. Korrespondenz 1883–1938* (Frankfurt a. M. / New York, 1986), 649S.

〔付記〕文献収集に際して野村修、二宮宏之両氏の協力を得た。ここに記して両氏に謝意を表する。

（宮崎大学教育学部助教授　　）